INTERVIEW

自治医科大学看護学部長
春山早苗先生

自治医大として考える「地域看護学」

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

へき地診療所の看護師の仕事を調査して

山田隆司（聞き手）　今日は自治医科大学の看護学部にお邪魔しました．看護学部は，前身の自治医科大学看護短期大学を改組し2002年に開設されました．看護学部は医学部のように都道府県からの選抜ではなく，一般的な入試制度を採っていますが，先生が着任されてから，へき地医療・地域医療にも目を向けていただいていますので，その辺りのお話や自治医大での特定行為に係る看護師の育成などについても伺えればと思っています．

まずは，先生の経歴を簡単に紹介していただけますか．

春山早苗　私は千葉大学看護学部を卒業し，東京都葛飾区で保健師になりました．その後，群馬県の保健師に採用されたのですが，群馬県立福祉大学校に教員として配属になりました．それが地域看護学，公衆衛生看護学を専門とする教育研究者の道を進むことになったきっかけです．そのとき，千葉大学の大学院に行ったのですが，そこでご指導いただいたのが自治医大初代看護学部長の野口美和子先生で，野口先生に声をかけられて，こちらにまいりました．

山田　もともとは地域で保健師の活動もされたのですね．われわれが地域へ行くと，もちろん診療所の看護師さんは非常に重要なパートナーなのですが，予防注射や保健事業などで保健師さんが一番の同僚のようになります．私の少し前の世代だと，地域のことをなんでも知っていて，

地域の人から頼られている保健師さんが多かったですね．だんだん分業が進んで，そういうタイプの保健師さんが徐々に少なくなりましたが．

春山　そうですね．

山田　先生はここに赴任してどれくらい経つのですか？

春山　つい昨日のように感じますが，もう丸15年経って16年目になります．

山田　16年前に着任された当初の自治医大看護学部というのはどんな感じだったのですか．

春山　着任して，初代の学部長にまず言われたのが，地域医療に貢献するという自治医大の使命があるのだから，看護学部も地域看護学に力を入れていきたいということでした．何をしようかと思ったときに，自分自身あまりへき地というものを考えたことがなかったので，「離島や山村過疎地域の看護ってどういうものなのだろう」というところに着目しました．そこでへき地診療所でどういう看護がなされているのか，全国調査をすることにしました．

　そうしたところ，大体医師１人，看護師１人で，その看護師も半分ぐらいは准看護師というところが多く，でも保健師のような活動や医師がいない時の救急対応，あるいは訪問看護，場合によっては医師の代わりに訪問診療的なこともしたりなど，非常にマルチに活動していて，すごいなと思いました．ところがへき地診療所の看護師というのは，保健師などのパートナーとして意外に認識されていないようで，そういう課題も一つ見えてきました．

山田　まさしくそのとおりです．自治医大卒業生は，へき地診療所へ義務年限で行かされるのですが，そこは事務員，看護師，それぞれ１人ずつで，看護師さんは大体地元の人ですから，基本的に地元の人たちのことをよく知っていて，患者さんも，新人の医者の方は見ずに看護師さんに話をする．そうすると看護師さんも「先生，この人はいつもこうなのだから，こうしなさい」と教えてくれます．着任した当時は私も看護師さんの言うことだけを素直に聞いていました（笑）．地域の診療所の看護師さんはマルチタスクで，外来の介助や往診の同行，調剤の手伝いだけでなく，新米医師に対する苦情の受け付けや診療所の開け閉め，掃除まで，およそ看護専門職とは言えないような仕事まで担っています．私自身そういう人に守られて育ち，重要な同僚というより，私にとって育ての親のようなものです．

看護師の資質向上の課題

山田　地域で患者さんとの継続性や近接性について，診療所の看護師さんは圧倒的な力を持っていると感じています．地域を守ってきた看護師さんたちの，そういったところに視点を向けていただけたというのは本当に素晴らしいことだと思います．へき地の診療所の看護師さんの実態調査をされて，今後の看護師さんの教育や育成についてはいかがでしょうか．

春山　やはり課題はへき地では研鑽の機会が非常に少ないということ．それから人材の確保が大きな課題だと思います．

　そのころ，自治医大地域医療学センターの